

蒙古字韻の改装などについて

吉池孝一

—

元の朱宗文による校訂の序(至大戊申・1308年)が付された「蒙古字韻」の写本が、ロンドン大英図書館のOriental&India Office Collectionsに所蔵されている。この写本は現在知られているたった一つのテキストであり、尾崎雄二郎1962の、欠筆などの研究により清の乾隆年間に書写されたことが分かっている。このロンドンの写本を実際に見てその体裁を報告したものに橋本萬太郎1971、遠藤光暁1990などがある。いま橋本萬太郎1971の2頁によると次のようにある。

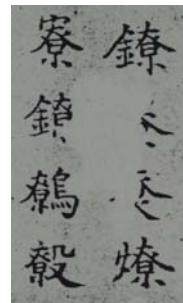
本文は茶色の渋紙〔後に述べる関西大学複製本の写真が大分汚ないのはこの色のせいであろう〕に職人的に見事な筆で墨書されており、現装では全部白紙で裏打ちされている。関西大学の東西学術研究所は1956年にこの抄本の写真複製本を刊行されたが、その複製本にも見られる通り、下冊に虫食いがある。その虫食いは、今は亡き先輩石浜純太郎先生が丁度半世紀前に外遊された折に写真撮影されたのと寸分たがわず、先生も親しくこの書を手にしたのかと思うと、これは私事にわたるが、筆者は原抄本をひもときながら胸をしめつけられるような懐かしさにおそわれた。

(2頁)

「現装では全部白紙で裏打ちされている。」とあるがそれは以下の状況を指すものである。



関西大学写真複製本



改装後のロンドン写本¹

関西大学写真複製本は虫食いを通して次の葉が見える。これより、写真を撮った時点では、白紙の裏打ちがなされていなかったことがわかる。関西大学東西学術研究所の写真

¹ 1994年、大英図書館より入手したマイクロフィルムによる。

複製本は石浜純太郎氏が1921年に撮影したものに拠るというから、すくなくとも1921年（撮影期日）から1971年（橋本氏報告）の間に大英図書館において裏打ちされ現在の装丁となったことになる。

二

現在の蒙古字韻は、各葉裏打ちがなされ、灰色の表紙が付されて二冊本となっているわけであるが、その灰色の表紙と裏打ち用の白い紙の天地は共に、茶色の写本本体よりも3cmほど大きい。しかもその蒙古字韻二冊は、帙にびたりと収まる²。

おそらく、帙の大きさに合わせて、改装時に灰色の表紙および裏打ち用の紙の大きさを定めたのであろう。現在の帙がもともとのものであるのか、それとも1921年以降新たに作られたものか或いは他の帙を流用したのであるのかという事について確かなことは分らない。

三

なお、現在大英図書館に所蔵されている蒙古字韻および大英図書館より供給されるマイクロフィルムは裏打ちなどの改装が施されたものであり、改装前の状態は今となっては関西大学の写真複製本でしか知ることができない。その点で、関西大学の写真複製本は、パスパ文字と蒙古字韻の研究史にとって貴重な資料ということになる。

参考文献

尾崎雄二郎1962. 「大英博物館本蒙古字韻札記」, 『人文』(京都大学教養部)8号, 162-180頁。

橋本萬太郎1971. 「ブリテン博物館旧抄本蒙古字韻雑記」, 『AA研通信』14号, 1-4頁。

遠藤光暁 1990. 「在欧のいくつかの中国語音韻史資料について」, 『中国語学研究 開篇』7号, 25-44頁。

吉池孝一 1995. 「『蒙古字韻』のロンドン写本とその複製本」, 『語学研究』(拓殖大学語学研究所)78号, 197-208頁。

² 1994年8月ロンドン写本を直接手にする機会を得た。その時の吉池の調査による。吉池孝一 1995 参照。